

インマヌエル中目黒キリスト教会

2013年5月12日聖日礼拝

ペンテコステの前に
「どのように祈ったら
よいのですか」

使徒の働き26章12～23節

ローマ人への手紙7章1～6節

河村従彦 牧師



聖書朗読

新約聖書

使徒の働き26章12 – 23節

聖書本文は新改訳聖書第三版
(©新日本聖書刊行会) を使用しています。

第二版の聖書はp259~/ 第三版の聖書はp~282

- 12 このようにして、私は祭司長たちから権限と委任を受けて、ダマスコへ出かけて行きますと、
- 13 その途中、正午ごろ、王よ、私は天からの光を見ました。それは太陽よりも明るく輝いて、私と同行者たちとの回りを照らしたのです。
- 14 私たちはみな地に倒れましたが、そのとき声があって、ヘブル語で私にこう言うのが聞こえました。

サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。』

15 私が『主よ。あなたはどなたですか』と言いますと、主がこう言われました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。』

16 起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現れて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。

17 わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。

18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあって御国を受け継がせるためである。』

19 こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず

20 ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えて来たのです。

21 そのために、ユダヤ人たちは私を宮の中で捕らえ、殺そうとしたのです

22 こうして、私はこの日に至るまで神の助けを受け、堅く立って、小さい者にも大きい者にもあかしをしているのです。そして、預言者たちやモーセが、後に起こるはずだと語ったこと以外は何も話しませんでした。

23 すなわち、キリストは苦しみを受けること、また、死者の中からの復活によって、この民と異邦人との最初に光を宣べ伝える、ということですよ。」

聖書朗読

新約聖書

ローマ人への手紙7章1－6節

聖書本文は新改訳聖書第三版
(©新日本聖書刊行会) を使用しています。

第二版の聖書はp274~/ 第三版の聖書はp298~

- 1 それとも、兄弟たち。あなたがたは、律法が人に対して権限を持つのは、その人の生きている期間だけだ、ということを知らないのですか——私は律法を知っている人々に言っているのです。——
- 2 夫のある女は、夫が生きている間は、律法によって夫に結ばれています。しかし、夫が死ねば、夫に関する律法から解放されます。

- 3 ですから、夫が生きている間に他の男に行けば、姦淫の女と呼ばれるのですが、夫が死ねば、律法から解放されており、たといい他の男に行っても、姦淫の女ではありません。
- 4 私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。

それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。

5 私たちが肉にあったときは、律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いていて、死のために実を結びました。

6 しかし、今は、私たちは自分を捕らえていた律法に対して死んだので、それから解放され、その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えているのです。

説 教

ペンテコステを前に

「どのように祈ったら

よいのですか」

使徒の働き26章12～23節

ローマ人への手紙7章1～6節

河村従彦 牧師



A ペンテコステの二つの意味

- 1 神さまの啓示の完成～聖霊が与えられた
- 2 教会の誕生 ～教会時代の幕開け

B すでに実現している恵み

I ペンテコステの意味

A 1:8 聖霊が臨むときに証人となる

B 証人の意味 ~使徒の働きに13回

1 初代教会に関して 2:32など

→よみがえりの証人

2 パウロに関して 26:16など

→見たことの証人

→イエスさまの十字架と復活の証人

として整えられる

C ペンテコステについて抱くイメージ

- 1 聖霊が臨むとき力を受けるというイメージ
- 2 聖霊の力とは、キリストの十字架と復活の証人になる力
- 3 右肩あがりのクリスチャンのイメージ？
- 4 わたしたちのコンテクストの中で……

II 使徒の働きの文脈

A 構成

1:~9: 初代教会の誕生

9:~21: パウロの活動 ~宣教旅行・
自由 8.5章 12年間

21:~28: パウロの告白 ~幽囚の身・
制限 7.5章 3年間

→ 詳しい→重要

→21章以下が、実はルカが
一番言いたいこと

- B そこから見えるルカの言いたかったこと
- 1 神さまの特別な働きがあつて (= 聖霊)
教会がスタートした
→決して怪しげな団体ではありません！
 - 2 弟子たちはキリストの証人になったが、
実はもう一人証人がいる
→パウロ先生もそうなんです！

C パウロにとっての最大のテーマ
→26:5 律法の束縛

III パウロの信仰 7:6

A パウロの律法理解

1 律法の性質

聖なるもの 7:12

靈的なもの 7:14

2 律法の機能

人間を支えることができる

罪を知ることができる 7:7

罪を矯正するのではなく、罪をかき回す 5:20、7:8

罪を刺激して、良くない方向に導く
7:10~11

B 律法に生きる人生

1 完璧な配偶者というイメージ

最初 ~こんなすばらしい旦那さん
ところが.....血も涙もない

- 2 理不尽な夫に追い込まれた妻
自分の行動を改善しようと努力
律法主義は教会に致命的打撃を与える

C パウロが到達した結論

- 1 人間は基準を達成することで神さまを喜ばせることは出来ない
- 2 律法はキリストに導く養育係

D 全く新しい方法

- 1 この関係の解消のために
→どちらかが死ねばいい
- 2 自分が一度死んでしまえばよい
→十字架
- 3 新しく結ばれるイエスさまとの関係
～人格的信頼と愛

E 戻る傾向

- 1 最初は新しいご主人と一緒にあって...
- 2 基準をくださいと言い始める
- 3 もとの姿に戻って行く
- 4 段々不安になって.....

- Q 律法なしにクリスチャンとして正しい生き方が出来るのですか
- Q 律法は聖なる、靈的なものならば、神の民として守らなくても良いのですか
- Q 律法を気にしないで良いのならば、人間は怠惰にならないか
- Q 律法を守るほうがイエスさまを愛することが出来るのではないか

パウロの言い方

～ペンテコステを越えて恵みの時代が来ているのに……

どうしてそうではないかのように生きるのか
律法と絶縁したはずなのに、もう一度古い旦那さんとの関係に戻ろうとするのか

しめくくり

恵みで生きる ～聖霊が助けてくださるから

- 1 神さまの子どもとして生き生きと 8:15
- 2 成長は神さまが 8:26
弱いという自己認識
自分でどのように祈ったらよいかすらわからない